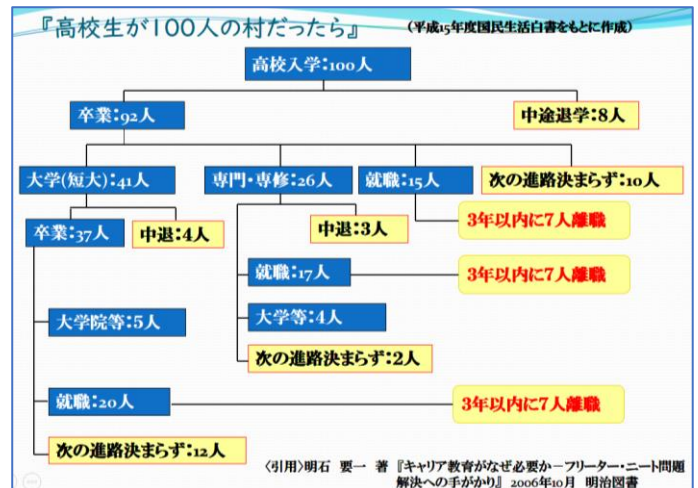




「高校生が100人の村だったら」

私が教諭時代に一年間現場を離れ、研究機関に在籍したことがあります。その当時、私がある本を読んで当時まとめたのが次のスライドです。「高校生が100人の村だったら」というタイトルで、その高校生の進路を追っていくと、92人が卒業し、中途退学が8人です。92人の中でも次の進路が決まらない人が10人います。さらに就職して3年以内に7人が離職していくな

どし、100人の高校生の中で60人が進路変更をしています。そして現在ですが、新卒採用枠の拡大、フリーター数の減少など、若年雇用問題は一段落したかのように見えます。ニートやフリーター、そして若年者の早期離職傾向についての社会的関心も一時ほどの盛り上がりを見せず、沈静化しています。しかし、就職後の若年者の早期離職傾向という本質的な問題は未解決のままです。



関心も一時ほどの盛り上がりを見せず、沈静化しています。しかし、就職後の若年者の早期離職傾向という本質的な問題は未解決のままです。

産業界が求める人材は、主体性、コミュニケーション能力、実行力、協調性、問題解決能力、社会性など、非認知能力なのですが、未だにプロセスよりも結果を求め、「点数至上主義」が残っています。また、家庭や社会の中で培われなければならないことが、学校に依頼されるようになってきています。フランスの思想家 J.Jルソーは、著書の中で「子どもを不幸にするいちばん確実な方法はなにか、それをあなた方は知っているだろうか。それはいつでもなんでも手に入れられるようにしてやることだ」と記しています。便利さ豊かさの生活は受け身の生活になり、創造性や社会性の弱体化、人間関係の希薄化・孤立化へと繋がっていきます。大人の「危険=禁止」の考え方を押し付けることで、チャレンジ精神や創造性などが発揮されなくなります。さらに、失敗を許さない「潔癖主義」「完全主義」は、創造性、能動的な動きを封じ、親や大人の過干渉が、指示待ち人間、責任の不在などから、「やる気」「責任感」の喪失へと繋がります。

本校では、子供たちが「決める」ことを大切にしています。これは子供たちの中に「〇〇ができる」「〇〇にも挑戦しよう」という自信を生むからです。心理学では、人が自らの行動を自分自身で決めたいという欲求のことを「自律的動機付け」と呼びます。何を学び、勉強の計画をどう立てるか、人の役立つためにどう考え行動し、将来何をを目指すのか、自分自身で悩み・決めるのです。その意思が尊重され、発揮されるときに、子供たちは活躍し「わくわく」した表情を見せます。子供たちの発達段階ももちろん考慮した上で、目の前の子供たちならばどこまで任せられるのか、どこまで親や教師のガイドが必要なのか考えながら関わり、最後は自律へと向かわせることが、「高校生が100人の村だったら」の問題解決に役立つと考えます。